様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　９ 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ１７３５１

研究課題名（和文）学力保障を基盤にした「持続可能な開発のための教育」の評価方法とカリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of assessment methods and curricula for "Education for Sustainable Development" aiming at fostering competencies for realizing sustainable world

研究代表者
木村　裕（Kimura, Yutaka）

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：９０５５１３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　学力保障を基盤に据えた「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development：ESD）」の実践を日本の学校教育の場に広げることを目的として、理論と実践の往還を重視した研究を実施した。本研究を通して、ESDを実践する際の教育目標の設定と教育評価の方法論に関する理論的な枠組みや実践のあり方の整理・構築、カリキュラム開発の指針の明確化、具体的なカリキュラム開発および実践づくりとその検証等に関する成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究で得られた研究成果の主要な学術的意義として、先行研究では不十分であると考えられたESDにおける教育目標の設定ならびに教育評価のあり方を探究するとともに、それらをふまえたカリキュラムの開発につなげることを試みた点が挙げられる。教育評価は学習者の学習状況ならびに実践の効果や課題を丁寧に把握し、その後の学習や実践の改善に生かすという機能を有している。そのため、本研究の成果は、充実したESDを展開し、それによって学習者の学力保障を実現するための方途を示すものになり得るものでもあり、社会的にも重要な意義を持つものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：　The aim of this research is to help promote effective practices of “Education for Sustainable Development”, which can enable learners to acquire competencies for realizing the sustainable world, implemented at schools mainly in Japan. I conducted research both theoretically and practically to find out the way to 1) construct a theoretical framework for setting educational goals and managing educational assessment, and apply them in practice; 2) clarify a guideline for curriculum development; and 3) develop, implement and improve curricula for schools.

研究分野：教育学、教育方法学

キーワード：持続可能な開発のための教育　教育評価　カリキュラム　グローバル教育　開発教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究で取り上げた「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development：以下、ESD)」は、持続可能な社会づくりの担い手を育むことをめざした教育活動である。これは、日本政府の提案によって 2005 年に開始された「国連持続可能な開発のための 10 年（以下、DESD)」などを通して、各国で取り組まれてきた。DESD は 2014 年が最終年であるが、その後も ESD の理論と実践のさらなる深化・発展に向けた取り組みは進められるため、日本における ESD 研究の重要性はますます高まることが予想された。

ESD がめざす持続可能な社会づくりの担い手を育むためには、解決すべき社会問題の原因や現状の把握、他者との協働による解決策の模索、問題解決に向けた行動への参加などを行う「学力」を学習者が獲得することが不可欠である。しかし先行研究においては、学習者に獲得させるべき学力の具体的な内容を示す教育目標の精緻化と、その教育目標の達成度合いを把握してその後の学習の改善や発展を促すための教育評価の方法論に関する研究が不十分であると考えられた。そのため、研究代表者は、この点に関する研究を進めることによって確実な学力保障を基盤に据えた ESD の実践の質的な進展をめざすことが必要であると考えた。

また、研究代表者は、本研究課題の申請時までに、日本とオーストラリアの開発教育研究およびグローバル教育研究の蓄積に着目して研究を進めていた。開発教育やグローバル教育は、ESD とも深く関わるものである。こうした状況を背景として、研究代表者が行ってきた開発教育研究およびグローバル教育研究を基礎として ESD の理論と実践を分析することにより、ESD の実践に向けた教育目標の設定と教育評価の方法論の構築を行うとともに、それを生かしたカリキュラムを現場の教員とともに開発することが、学力保障を基盤に据えた ESD を理論的にも実践的にも深化・発展させるための重要な研究課題であると認識し、本研究課題を申請した。

２．研究の目的

本研究では、日本の学校教育の場に学力保障を基盤に据えた ESD の実践を広げるために、理論と実践の往還を重視した教育方法学的アプローチによって、教育目標の設定と教育評価の方法論の構築を行うとともにそれに基づくカリキュラムを開発することを、その目的とした。具体的には、まず、研究代表者がこれまでに行ってきた開発教育研究およびグローバル教育研究の成果をふまえて日本とオーストラリアにおける理論と実践の研究蓄積を批判的に検討することにより、ESD の実践に向けた教育目標の設定と教育評価の方法論の構築を行い、さらに、その成果に基づいて、日本の教員とともに学校教育の場で生かせるカリキュラムを開発することをめざした。

３．研究の方法

本研究では理論面の研究と実践面の研究を主要な柱とし、両者を往還させながら研究を進めた。

理論面の研究については、主に日本とオーストラリアにおける議論や研究蓄積に注目し、文献を中心とした資料の収集と分析を軸に、主に次の 2 点に力点を置いて検討を進めた（ただし、適宜、関係者へのインタビューや実践分析等を通じて理論的な枠組みや考え方が実際の実践にどのように生かされているのかについても調査を行った)。

1 点目は、実践の質を保障するとともにより効果的な実践を展開するための、教育目標の設定のあり方、教育評価を実践する際の評価の観点や評価方法のあり方、実践を通して育成すべき学力の内実とそうした学力を育成するための取り組みのあり方についての検討である。この点については、ESD のみならず、教育評価論や学力論に関する議論についても資料の収集や分析を行いながら、検討を進めた。2 点目は、学校現場でのカリキュラム編成や実践づくりを効果的に進めることを可能にする制度設計のあり方の検討である。この点については、オーストラリアのナショナル・カリキュラムや学力調査に関する制度の具体像とその特徴を検討することによって迫った。

実践面の研究については、特に、上述した理論面の研究を通して得られた成果を学校現場の教員や他の研究者に提案することや、学校現場のニーズを丁寧にふまえることなどを意識しながら、主に次の 2 点に力点を置いて検討を進めた。

1 点目は、教育目標の設定や評価方法のあり方の検討である。この点については、主に日本とオーストラリアの学校現場における取り組みに関する調査を通して、学習指導案や教材、実践の分析等を行うことによって迫った。2 点目は、単元開発や授業研究を通した実践づくりと実践の検討である。この点については、自身が主宰する研究会において学校の教員や他の研究者とともに単元開発を進めたり、校内研修会等を通じて学校の教員と授業研究を進めたりすることによって行った。

さらに、以上の取り組みに基づいて得られた研究成果については、適宜、学会や研究会、著書や論文、学校現場での校内研修会等を通じて発信するとともに、それを通して他者との議論につなげることを意識した。

４．研究成果

本研究では、研究代表者がこれまでに行ってきた開発教育研究およびグローバル教育研究の成果をふまえつつ、先述した目的と方法によって研究を進めてきた。

本研究の主な成果としては、まず、ESD を実践する際の教育目標の設定と教育評価の方法論に関する理論的な枠組みや実践のあり方の整理・構築が挙げられる。学力保障を基盤に据えたESD の実践を広げることをめざすという問題意識や、「目標に準拠した評価」を行うことが求められている日本の学校教育の現状に鑑みれば、教育課程編成や実践を進めるにあたっては、明確な教育目標を設定することと、その達成度を丁寧に把握して児童生徒の学習の改善ならびに教員の授業の改善に生かしていくことが求められる。また、教育目標の設定と教育評価の方法論については、設定した教育目標の到達度を把握するために適した評価方法や評価課題、評価規準・基準を設定するというかたちで、両者を関連づけて捉え、実践に生かすことが肝要である。

以上を念頭に置きながら、研究代表者のこれまでの研究成果もふまえて、ESD を進めるにあたって設定すべき教育目標を「社会認識の深化」「自己認識の深化」「行動への参画」という視点で整理した。さらに、パフォーマンス評価を行うことの重要性と可能性、ならびに、「社会認識の深化」「自己認識の深化」「行動への参画」それぞれの観点に関する力がどのように高まると考えられるのかという点をふまえながら、評価基準表であるルーブリックの試案を精緻化した。なお、「社会認識の深化」とは、ESD で取り組むべき諸問題の現状や原因、問題同士の関係、そうした問題の背景にあるイデオロギーや権力関係などの実態についての認識を深めることを、「自己認識の深化」とは、諸問題と自分自身との相互依存関係や問題解決に資する自身の力量に関する認識を深めたり、イデオロギーや権力などが自他の価値観や社会認識などに対して与えている影響についての認識を深めたりすることをさす。また、「行動への参画」とは、「社会認識の深化」「自己認識の深化」を基盤として問題解決に向けた行動に参画することをさす。

ところで、ESD では持続可能な社会づくりをめざして、まだ誰も「唯一絶対の正解」を見つけられていない諸問題の解決策や社会のあり方、そうした社会の実現方法などを探究することが求められる。そのため、「社会認識の深化」「自己認識の深化」「行動への参画」という視点で整理した能力だけではなく、探究力の育成という視点からも、教育目標および教育評価のあり方について検討する必要があった。そこで、「課題の発見 → 調査・分析 → 探究の成果のまとめ・発信 → 課題の発見 →（以下、繰り返し）」というプロセスから成る探究活動と、そこで育成すべき探究力の内実についての整理を行うとともに、それぞれの場面において育成することが必要となる探究力（「課題設定」に関する力、「資料の解釈・分析」に関する力など）の習得状況を把握するためのルーブリックの試案を開発した。

以上の内容は、主に「カリキュラム編成」「授業づくり」という観点から見た教育目標と教育評価のあり方に関するものである。これらに加えて、本研究では、オーストラリアで全国的に展開されてきた「オーストラリア・サステイナブル・スクール・イニシアティブ（Australian Sustainable Schools Initiative）」（以下、「イニシアティブ」）に関する取り組みにも注目しながら、「学校づくり」を視野に入れた教育目標と教育評価のあり方についての検討も進めた。「イニシアティブ」では、カリキュラム編成や授業づくりだけではなく、学習環境の整備や学校づくり、学校運営、コミュニティとの連携、コミュニティのあり方などまでを射程に入れた取り組み（「ホールスクール・アプローチ（Whole School Approach）」と呼ばれる）が進められている。本研究では、特に南オーストラリア州における取り組みに注目し、そこで開発・活用されている「モデル」やルーブリックの具体像を明らかにするとともに、それらが、各学校や教員の実践づくりや実践の改善を可能にし、実践の質を保障するための役割を果たしていることを指摘した。さらに、これらをふまえて、子どもも大人も自身の生活と未来の社会を創造するための主体であり重要な役割を担う一員であるという認識に立ったうえで、そうした主体となり、また、役割を担うために、「持続可能性」を意識しながら既存の社会のあり方や自他の生き方を批判的に検討し、めざすべき姿を模索し、その実現に向けて取り組むという学力の育成を図ることが重要になると考えられることや、そうした学力を育成するための効果的で豊かな実践を展開できるようにするためには、学校の裁量の余地を保障したり教員の創意工夫を生かしたりすることのできる制度設計や教員の力量形成に資する取り組みもあわせて行うことが重要であることなどを指摘した。

本研究ではまた、以上の成果もふまえながら、学校教育の場で生かせるカリキュラム開発の指針の明確化にも取り組んだ。そして、ESD に関する研究成果だけではなく、特に日本における教育評価論や学力論に関する議論もふまえながら、カリキュラム開発の指針の試案を開発し、校内研修会等を通じて提案した。そこでは、学習活動の流れや学習者への支援のための手立てなどを具体化する前に、教育目標の明確化や教材研究・教材開発を行うとともに、評価課題・学習課題やルーブリックづくりなどを行うことの重要性を強調した。これにより、「目標に準拠した評価」を実質的に位置づけ、学力保障の実現に資するかたちで ESD のカリキュラム開発や授業づくりを行えるようにすることをねらった（もちろん、この指針の試案を具体的な ESD の実践づくりに生かすためには、先述した ESD の教育目標やルーブリックなどと併用することが不可欠である）。

本研究ではさらに、具体的なカリキュラム開発および実践づくりとその検証を行った。具体的には、先述した研究成果もふまえながら、自身が主宰する研究会において学校の教員や他の研究者とともに単元開発を進めたり、校内研修会等を通じて学校の教員と授業研究を進めたりすることによって、具体的なカリキュラム開発や授業づくり、教材づくりなどに関わるとともに、実際の授業場面の観察などを通して、その効果や改善策に関する検討も進めた。

以上のようなかたちで、本研究では、研究代表者がこれまでに行ってきた開発教育研究および

グローバル教育研究の成果をふまえて、主に日本とオーストラリアにおける理論と実践の研究蓄積の批判的な検討を行うとともに、日本の教員との議論や授業研究も進めてきた。これにより、教育目標の設定と教育評価の方法論に関する理論的な枠組みや実践のあり方の整理・構築、カリキュラム開発の指針の明確化、具体的なカリキュラム開発および実践づくりとその検証等に関する研究を進めることができた。教育評価は学習者の学習状況ならびに実践の効果や課題を丁寧に把握し、その後の学習や実践の改善に生かすという機能を有している。そのため、本研究の成果は、充実した ESD を展開し、それによって学習者の学力保障を実現するための方途を示すものにもなり得ると言える。

ただし、本研究を通して得られた研究成果の中には、校内研修会等の中で提案することにとどまり、論文や書籍等を通じて広く公表するということまでがまだできていないものもある。また、「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：以下、SDGs）」の提起と取り組みが各国で行われており、SDGs の達成に向けて教育活動の重要性が指摘されている現状に鑑みれば、ESD の果たす役割はますます重要になってくることが予想される。今後は、本研究を通して取り組んできた課題についての研究をさらに進めるとともに、研究成果のさらなる発信にも努めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 木村裕	４．巻 第58号
２．論文標題 学校での持続可能性に関する教育活動の実践上の要点と課題の検討－オーストラリア・サステイナブル・スクール・イニシアティブの取り組みに焦点をあてて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 比較教育学研究	６．最初と最後の頁 pp.75-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村裕	４．巻 第22号
２．論文標題 南オーストラリア州の学校教育の概況と近年の取り組み－カリキュラムと教育評価に焦点をあてて	５．発行年 2016年
３．雑誌名 オセアニア教育研究	６．最初と最後の頁 pp.24-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村裕	４．巻 第26号
２．論文標題 価値観や行動に関わる指導と評価に活かすルーブリック開発の試み－オーストラリアのグローバル教育の検討をふまえて	５．発行年 2016年
３．雑誌名 教育目標・評価学会紀要	６．最初と最後の頁 pp.1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村裕	４．巻 第21号
２．論文標題 オーストラリアとカナダが育成をめざす学力の内実と学力保障に向けた取り組み－両国の取り組みから見えてくる実践への示唆	５．発行年 2015年
３．雑誌名 オセアニア教育研究	６．最初と最後の頁 pp.67-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 竹川慎哉、木村裕
2．発表標題 【書評セッション】木村裕・竹川慎哉編著『子どもの幸せを実現する学力と学校－オーストラリア・ニュージーランド・カナダ・韓国・中国の「新たな学力」への対応から考える』学事出版、2019年
3．学会等名 オセアニア教育学会第23回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 木村裕
2．発表標題 オーストラリアにおける「持続可能性のための教育」に関する取り組みの検討
3．学会等名 日本比較教育学会第54回大会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 木村裕
2．発表標題 「持続可能な開発のための教育（ESD）の評価の観点の設定に関する一考察」
3．学会等名 日本カリキュラム学会第28回大会
4．発表年 2017年

1．発表者名 木村裕
2．発表標題 「各国事例　（1）オーストラリア」（課題研究発表「求められる学力の内実とその育成に向けた取り組みに関する研究－オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、韓国、中国の事例から」の一部を担当）
3．学会等名 オセアニア教育学会第21回大会
4．発表年 2017年

１．発表者名 Yutaka Kimura
２．発表標題 How can we develop effective curriculum to ensure the development of students as active and informed citizens?
３．学会等名 SCEAA (Social and Citizenship Education Association of Australia) Conference 2016（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 木村裕
２．発表標題 地球市民の育成をめざすグローバル教育のカリキュラム編成に関する一試論－オーストラリアのグローバル教育研究を手がかりとして
３．学会等名 日本公民教育学会第26回全国研究大会（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 木村裕
２．発表標題 現代オーストラリアの教育改革下でのグローバル教育実践の可能性と課題－ナショナル・カリキュラムとの関わりを中心に
３．学会等名 日本カリキュラム学会第26回大会
４．発表年 2015年

１．発表者名 木村裕
２．発表標題 オーストラリアのグローバル教育の検討をふまえて（課題研究「社会科で習得させる知識・理解と価値観・行動の指導と評価－国内外の関連領域の検討をふまえて」）
３．学会等名 教育目標・評価学会第26回大会（招待講演）
４．発表年 2015年

〔図書〕　計11件

1．著者名 木村裕（編著者）、竹川慎哉（編著者）、高橋望、趙卿我、鄭谷心	4．発行年 2019年
2．出版社 学事出版	5．総ページ数 176
3．書名 子どもの幸せを実現する学力と学校－オーストラリア・ニュージーランド・カナダ・韓国・中国の「新たな学力」への対応から考える	

1．著者名 杉本均（編著者）、南部広孝（編著者）、楠山研、ベー・シュウキー、李霞、宮崎元裕、鈴木俊之、隼瀬悠里、市川桂、森本洋介、服部憲児、山名淳、松浦真理、石川裕之、馬場智子、関口洋平、渡辺雅幸、門松愛、中島悠介、木村裕、工藤瞳、田村徳子	4．発行年 2019年
2．出版社 協同出版	5．総ページ数 315
3．書名 比較教育学原論	

1．著者名 西岡加名恵、鄭谷心、伊藤実歩子、大貫守、小山英恵、本所恵、木村裕、河原尚武、細尾萌子、赤沢早人	4．発行年 2017年
2．出版社 協同出版	5．総ページ数 pp.153-176
3．書名 教職教養講座　第4巻　教育課程	

1．著者名 青木麻衣子、伊井義人、植田みどり、金井里弥、木村裕、児玉奈々、馬渕仁、本柳とみ子	4．発行年 2015年
2．出版社 共同文化社	5．総ページ数 pp.18-35
3．書名 多様性を活かす教育を考える七つのヒント－オーストラリア・カナダ・イギリス・シンガポールの教育事例から	

１．著者名 赤沢早人、赤沢真世、石井英真、伊藤実歩子、遠藤貴広、奥村好美、川地亜弥子、木村裕、項純、趙卿我、鄭谷心、徳永俊太、西岡加名恵、二宮衆一、八田幸恵、羽山裕子、樋口太郎、樋口とみ子、藤本和久、細尾萌子、本所恵、渡辺貴裕	４．発行年 2016年
２．出版社 日本標準	５．総ページ数 pp.40-51
３．書名 グローバル化時代の教育評価改革－日本・アジア・欧米を結ぶ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考